

第9章 生田長江・森田草平・野上白川・昇曙夢『近代文芸十二講』

大正10年(1921)8月の『近代文芸十二講』(新潮社)は、世紀末思想をまとめたものである。思想・文芸講話叢書の1冊として出版されたものである。同書の広告には次のようにある。

近代思想の推移と発展とを説いて芸術上のあらゆるイズムと傾向とを詳述し、西洋諸國の近代文壇の体勢を説いて、人と作との總てを網羅し、以て近代文学の全景を鳥瞰的に展開す。四百六十頁の大巻、精到なる文学論と詳密なる文学史とを兼ねて、最も完備せる文芸百科全書なり。⁽¹⁾

また、広告には他の叢書として以下のものが紹介されている。執筆者と書名を紹介しておきたい。

中澤臨川・生田長江『近代思想十六講』

生田長江・本間久雄『社会問題十二講』

昇曙夢『トルストイ十二講』

楠山正雄『近代劇十二講』

宮島新三郎・相田隆太郎『改造思想十二講』

高須芳次郎『近世文学十二講』

千葉亀雄『欧米現代文学十二講』

ここでは『近代文芸十二講』の全体像とワイルドを取り上げている部分について詳細に論じてみたい。

(1) 生田長江

生田長江(1882-1936)は鳥取県出身の評論家、小説家、戯曲家、翻訳家。本

名は弘治。長江の号は上田敏の命名によるもの。明治 31 年(1898)にキリスト教に入信し、明治 37 年(1904)には上田敏等が創刊した『芸苑』の同人となった。明治 39 年(1906)には東京帝国大学哲学科美学科を卒業、明治 44 年(1911)にはニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』を日本で初めて翻訳したことは大きな業績として評価されている。馬場弧蝶、森田草平らと閩秀文学会をつくり、受講者中に平塚らいてうがいて、生田の命名により『青鞥』が誕生した。生田は大正 7 年～昭和 3 年(1918-1928)の『ニイチェ全集』に取り組んだ業績は大きな評価を受けている。大正に入ると生田は大杉栄や堺利彦らと交流を持つようになり、社会主義への関心も示している。大正 8 年(1919)にはマルクスの『資本論』の第一冊分を堺利彦の序文で出版もしているのである。こうした背景もあるが、大正 9 年(1920)には本間久雄と共に『社会改造の八大思想家』(東京堂書店)を世に送り出していることも注目に値する。

(2) 森田草平

森田草平(1881-1949)は岐阜県生まれの小説家、評論家、翻訳家。本名は米松。明治 29 年(1896)には東京帝国大学英文科を卒業。閩秀文学会の講座で講師を務めたが、聴講生であった平塚らいてうと関係を持ち、明治 41 年(1908)に栃木県塩原で心中未遂事件を起こしている。その後のこの心中未遂事件の後始末として執筆した小説『煤煙』が文壇デビューとなった。イブセン、ドストエフスキー、セルバンテス、ダヌンツィオ、ボッカチオなどの翻訳も手がけている。

野上豊一郎の紹介で大正 9 年(1920)に法政大学教授となる。また、最晩年には日本共産党に入党したことで話題となった。

(3) 野上白川

野上白川(1883-1950)大分県生まれの英文学者、能楽研究者。本名は豊一郎。明治 41 年(1908)に東京帝国大学文学部英文科を卒業。明治 42 年(1909)

法政大学講師となり、大正9年(1920)には文学部教授となる。森田草平、内田百閒、井本健作など漱石門下の文学者を教授陣に招聘する。終戦後の昭和21年(1946)には法政大学総長となる。なお、妻は小説家の野上弥生子(1885-1985)。

(4) 昇曙夢

昇曙夢(1878-1958)は奄美大島生まれのロシア文学者。本名は直隆。明治36年(1903)にニコライ正教学校を卒業し、同時に同校の講師。大正6年(1917)に陸軍士官学校教授、後に早稲田大学講師。の昇曙夢はゴーゴリ、ツルゲーネフ、トルストイ、ソ連初期の文芸理論を精力的に翻訳、紹介した人物である。日本におけるロシア文学紹介者の内田魯庵、二葉亭四迷と共にその功績は大きい。また、出身地である奄美大島の日本復帰に関する功績も高く評価されている。

代表作には明治40年(1907)12月の『露西亜文学研究』(隆文館)、明治43年(1910)5月の『露西亜現代代表作家六人集』(易風社)などがある。

(5) 『近代文芸十二講』

「文芸の社会的浸潤と云ふことは、近頃最も注目す可き現象である」⁽²⁾とは、本書の「序」の言である。文芸と社会の関係を強く意識しているものである。本書の内容もこれを受けて、その時代精神の基盤となっていることも取り上げられているのである。十二講の内容は以下の通りである。

- 第一講 近代思想の諸相
- 第二講 自然主義的精神の解剖
- 第三講 輓近思想の趨勢
- 第四講 文芸に於ける擬古主義、浪漫主義、自然主義
- 第五講 新浪漫主義文芸の勃興
- 第六講 佛蘭西近代文学

- 第七講 南欧近代文学
- 第八講 独逸近代文学
- 第九講 スカンヂナギヤ近代文学
- 第十講 露西亜近代文学
- 第十一講 英米近代文学
- 第十二講 世界文芸の現勢

巻末に「近代文学年表」が掲載され、本文の途中に「名著梗概」としての23の作品が紹介されている。ワイルドについては『ドリアン・グレエの肖像畫』が取り上げられている。以降は特に「第一講 近代思想の諸相」「第五講 新浪漫主義文芸の勃興」「第十一講 英米近代文学」について取り上げることにする。「第一講 近代思想の諸相」では特にワイルドについて触れていないが、時代精神をどう考えるかといったことを取り上げているので紹介しておきたい。

(6) 「第一講 近代思想の諸相」

「第一講 近代思想の諸相」では「(一) 近代精神」、「(二) 浪漫的運動— 第一人者ルッソオ」、「(三) 『世紀の痼疾』— 懷疑厭世」、「(四) 科学的精
神」、「(五) 個人主義」、「(六) 婦人問題」、「(七) 機械的人生観」、「(八) 唯
物的史観— 社会主義」が取り上げられているが、この当時の関心が何に向
けられていたかがよくわかる。

文学といふものは、此時代の情調に育まれ、又時代の色合を何より最も著しく現はすものであるから、其時代を研究するには其時代の文学を研究しなければならぬ、と共に、其時代の文学を研究するが為には、また其時代の情調とか色合とかをよく知つて居なければならぬ。⁽³⁾

また、もうひとつ注目しておきたいことは「(五) 個人主義」である。

すべての人間は矛盾した二様の生活を営んでゐる。一は、自然の生活の中で、たゞ自己の本能の導く儘に生きて行かうといふので、即ち個人生活だ。(省略) そこでなるべく、自分の欲望を制限したお互に譲り合つて、ある時には自分の利益を捨てゝも社会公衆のために盡し、之によつて人間の平和を保つて行かうといふ生活、即ち社会的生活が生じた。(4)

この個人主義とこれまでの婦人道徳とが衝突し、婦人が覚醒し、所謂「新しい女」が誕生したという流れもうなずけるところである。

(7) 「第五講 新浪漫主義文藝の勃興」

「第五講 新浪漫主義文藝の勃興」では、「(一) 自然主義と新浪漫主義」「(二) 新浪漫主義と印象主義」「(三) デカダンの藝術と象徴主義」「(四) 享樂主義」「(五) 新理想主義——人道主義」が取り上げられている。ここでは、「(三) デカダンの藝術と象徴主義」「(四) 享樂主義」でのワイルドへの言及について紹介しておきたい。まずデカダンの説明にあたり、ワイルドに言及している。

デカダンの文芸は即ち象徴主義の文芸である。象徴の中の情調象徴を説かうとするには、どうしてもデカダンの文芸を説かねばならない。一體文芸上でデカダンといふものの起こつたのは、十九世紀な半ば少し過ぎで、佛蘭西にはじめて起り、それから英國に入つてスケンバアンやオスカア・ワイルド等所謂唯美主義者の一團となり、更に独逸に入り伊太利に入り、それから殆ど何れの國にも行き亘つた。(5)

その後は、ヘルマン・バルを引用してデカダン派もしくは象徴派の芸術の4つの特色を挙げている。

- 1 情調（ムウド）を重んずるところの神経の芸術であつて、思想も若くは感情の芸術では無い
- 2 飽迄も人工を重んじて自然を避け自然を遠ざかるを旨とする
- 3 神秘に渴してゐる
- 4 異常なるものを求める⁽⁶⁾

としてまとめ、「要するにデカダンの芸術は神経過敏な近代人の刺激を食るところから生まれた芸術に外ならない」⁽⁷⁾として、4つの特色のうち、第4を除けば象徴主義の中心を形成するものとしているのである。第3の特色「神秘ということについては以下のような説明がある。

オスカア・ワイルドは「愛の神秘は死の神秘よりも更に大なり。」と云つてゐるが、必ずしも愛と死とに限らない、あらゆる現実をつきつめて行けば、そこに不思議にして廣大無邊なる神秘境が横はつてゐる。自然科学の力も神秘の扉にぶつつかつては、どうする事も出来ない。科学萬能の夢が破れて新しい神秘説が起つたのは當然の結果である。⁽⁸⁾

また、「詩と音楽」の関係からホイスラアを引き合いに出して、次のように述べている。

たとへば、ホイスラアの風景畫の如き、色彩の配合によつて音楽の感じを出さうとしてゐるので、世は彼を呼んで「色彩の樂人」と云つてゐる。又オスカア・ワイルドが「詩歌の享樂は主として其官能的方面即ち先づ音の方から来るので、繪畫の場合もまた同様である。内容たる題材とか思想とかは如何でもいゝ、寧ろそんなものを離れた色彩の配合や合奏から来るので、ホイスラアの畫は此點に於てすぐれてゐるのだ。」⁽⁹⁾

「(四) 享樂主義」では「近代享樂主義者の随一人は英吉利のオスカア・ワイ

ルドであらう」⁽¹⁰⁾とし、その代表作として *The Picture of Dorian Gray* を取り上げているのである。「芸術と道徳」についても当然言及していることは紹介しておきたい。

(8) 「第十一講 英米近代文学」

「第十一講 英米近代文学」の内容は以下の通りである。

- (一) 南欧文芸との融合
- (二) 擬古主義時代
- (三) 浪漫主義
- (四) 寫實主義乃至自然主義的傾向
- (五) 愛蘭文学の勃興――劇壇の一瞥
- (六) 評論壇の一瞥
- (七) 亜米利加の文学
- (八) 最近文壇の一瞥

なかでも「(五) 愛蘭文学の勃興――劇壇の一瞥」ではおもにワイルドとショーが取り上げられている。

凡そ近代文学者の中で、オスカア・ワイルド(1856-1905)ほど、矯激な芸術観、奇抜な人生観を有るってみた人は無い。彼は唯美派即ち美至上主義の作家で、ラファエロ前派――ロセッチ、スキンヴァアン等から脈を引いてゐる。ラファエロ前派は、肉感的、人工的をその特色としたが、ワイルドの芸術にも此二特色が著しい。⁽¹¹⁾

ワイルドの没年に関しては単なる誤植なのか、*De Profundis* の出版年と混同しているのかははっきりしない。ワイルドに関する記述は *The Picture of Dorian Gray* と *The Decay of Lying* を取り上げ、ワイルドの芸術観を説明

したものである。

芸術は自然人生を模倣するものでは無く、自然人生こそ芸術を模倣す可きものであると云ふので、極端な芸術至上主義の論である。⁽¹²⁾

ここでむしろ注目しておきたことは、「(五) 愛蘭文学の勃興——劇壇の一瞥」でも取り上げられているということである。明治時代にはイギリス文学が中心に取り上げられ、アメリカ文学は余り単独で紹介されなかったが、アイルランド文学が取り上げられ、ワイルドをここでも取り上げたことは、アイルランド文学の概念が定着していたことになる。ちなみに日本におけるアイルランド文学の紹介については昭和 62 年(1987)3 月の市川勇「日本におけるアイルランド文学の紹介」(『アイルランドの文学』成美堂)がよい参考となるが、大正 11 年(1922)9 月の佐藤清『愛蘭文学研究』(研究社)は、日本でアイルランド文学をまとめたものとしては先駆的な研究である。残念ながらワイルドについては取り上げられていない。以下「アイルランドとワイルド」を意識したものをいくつか紹介しておきたい。なお、参考になるものも取り上げた。

大正 11 年(1922) 9 月 佐藤清『愛蘭文学研究』研究社(参考)

昭和 8 年(1933) 9 月 矢野峰人『アイルランドの文学史』(英語英文学講座)新英米文学社(参考)

昭和 15 年(1940) 11 月 矢野禾積『アイルランド文芸復興』弘文堂書房

昭和 62 年(1987) 3 月 市川勇『アイルランドの文学』成美堂(参考)

平成 2 年(1990) 2 月 五味田幸夫「アイルランドおよびオックスフォード時代のオスカー・ワイルド」(『玉川学年学術教育研究所報』第 16 号)

平成 4 年(1992) 3 月 河野賢司「オスカー・ワイルドとアイルランド」

『倉敷市立短期大学研究紀要』第 20 号)

平成 7 年(1995)12 月 河野賢司『現代アングロ・アイリッシュの文学』
山口書店

平成 11 年 11 月 松村賢一編『アイルランド文学事典』研究社

『近代文芸十二講』におけるワイルドに関する記述は、明治 38 年(1905)6 月より連載を始めた片山正雄「神経質の文学」(『帝国文学』第 11 卷第 6 号)をさらに大きくまとめ纏め直した内容と言った方がいいだろう。ワイルドについては「享楽主義」のところでもワイルドが扱われていることが、これまでにない特色かもしれない。目次にも「唯美主義」という項目がなく、象徴主義、神秘主義、浪漫主義といった用語が並ぶようになった。本書では唯美主義者ワイルドというよりも享楽主義者ワイルドとの紹介が主流となっていることが特徴だろう。また、もうひとつ注目するとすれば、アイルランド文学としてワイルドが取り上げられたということであろう。「アイルランドとワイルド」、あるいは「アイリッシュネスとワイルド」については今後も大きな課題となるであろう。

参考資料

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』武蔵野短期大学、2001 年 6 月)

注

- (1) 生田長江・森田草平・野上白川・昇曙夢『近代文芸十二講』(新潮社、1921 年 8 月)以下の引用は 1923 年 1 月(18 版)よりのものである。奥付裏の広告より。
- (2) Ibid., p.1. (「序」より)
- (3) Ibid., p.2.

- (4) Ibid., pp.18-19.
- (5) Ibid., p.184
- (6) Ibid., pp.184-185.
- (7) Ibid., pp.185-186.
- (8) Ibid., p.189.
- (9) Ibid., p199.
- (10) Ibid., p.103
- (11) 『近代文芸十二講』、p.399.
- (12) Ibid., p.401.